

都道府県別賞一等

生命保険を考える

神奈川県 大和市立つきみ野中学校 一学年

亀崎 宏太

我が家にとって「生命保険」とは、とても深いテーマである。それは、苦労と争いの歴史があるからだ。

僕の母は両親との折り合いが悪く、高校生のときに学校で倒れ、病院に運ばれたそうだ。死因でよくみる「多臓器不全」状態で、一時的に内臓の働きが止まり、透析やインスリン注射をして回復したらしい。精密検査をしてもそれらしい器質異常はみつからず、結局は「思春期に強いストレスが継続したため」との診断となったそうだ。その後も両親との関係性はそう簡単には変わらず、体調の異変は度々起こり、母にとってはかなり辛い人生だったようだ。

現代のように「持病があっても……」のような保険はまだ出来ておらず、簡易透析を一度でも受けていれば告知条件に触れて保険に加入出来なかったため、母は友達が海外旅行にお金を使っているときでも、将来の医療費のために貯めていたそうだ。そして、実際に今の母の医療費はとても高額だ。それでも困らないのは、母が将来を見越して準備していたからだと思う。「生命保険」とは、その準備を個の力ではなく集合体として考え、集合体だからこそその利点を高く活かした商品だと思う。

僕も兄も、現在は全くの健康体である。でも母は、自分の体験を踏まえ、僕達が小さい頃から保険を掛けてくれている。まずは健康でいてほしい。それでも、もし病気にかかってしまったときには、出来る限りの治療を受けられる「生きるための保険」だ。これは、僕達への母の愛だと思っている。

我が家の争いの歴史というのは、父方の祖母と僕の母、そして父と母との意見の相違のことである。父と母が結婚をし、母が当然のように父を保険に加入させたとき、母は父方の祖母からひどく怒られたそうだ。「私の息子の命を金に換えるつもりか」と。年に一度、保障内容の確認に来る保険会社の営業職員の人も言っていたが、今でもそう考えている人は多いらしい。祖母がそういう考え方なので、実は僕の父も同じである。支出に占める保険料のことで、ことある毎に母に文句を言っている。

家計とは何か、我が家の実情がどうなのか、僕には難しいことはわからない。でも、病を抱え、やっとの思いで僕の面倒をみてくれている母のことは、父もわかっている筈だ。

では、父が先に死んだら僕達はどこに住み、どうやって学校の費用を払うの

第54回中学生作文コンクール

だろうか。それ以前に、祖母のことをどうするつもりなのだろう。僕の祖父は被爆者であったため、亡くなるまで医療費も入院費も全くかからず、葬儀の費用まで国から支払われた。

でも祖母は被爆者ではない。何の保険にも入っていない。長男も長女もガンで亡くし、もう僕の父しかいない、これからの自分の人生をどう思っているのだろうか。

僕が我が家の将来を考えたとき、高齢化社会以前の問題として、普通に暮らし、学び、多少の楽しみも共有し、家族と平和に過ごしたいと思う。そういった意味では、十三歳の僕は「生命保険」に対する母の考え方には賛成である。